

神の系図

マタイ 1:1~17

[導入]

みなさん、改めておはようございます。そしてお久しぶりであります。
先週まで3ヶ月間のサバティカル休暇をいただきました。本当にありがとうございます
またこうして、みなさんと一緒に礼拝できる事を本当に嬉しく思います。

サバティカルということもあって、日曜日はいろんな教会に行ってみました
でも、やはりめぐみ教会の礼拝に出たい、という思いが強かったです
ですから、ある意味で12月になるのを待ちわびていたという感じでもあります

さて、今日は救い主誕生を待ちわびていた神の民について学びたいと思います
イスラエルがメシアの到来を待って、待って、待ちわびていた
そんな思いをマタイの系図から読み取っていけたらと思います。

[聖書朗読] マタイ 1:1~17(新改訳 2017)

マタイ 1:1~2
1:1 アブラハムの子、ダビデの子、
イエス・キリストの系図。
1:2 アブラハムがイサクを生み、
イサクがヤコブを生み、
ヤコブがユダとその兄弟たちを生み、

1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

1:2 アブラハムがイサクを生み、イサクがヤコブを生み、
ヤコブがユダとその兄弟たちを生み、

1:3 ユダがタマルによってペレツとゼラフを生み、
ペレツがヘツロンを生み、ヘツロンがアラムを生み、

1:4 アラムがアミナダブを生み、アミナダブがナフションを生み、
ナフションがサルマを生み、

1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、

ボアズがルツによってオベデを生み、オベデがエッサイを生み、

1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。

ダビデがウリヤの妻によってソロモンを生み、

1:7 ソロモンがレハブアムを生み、レハブアムがアビヤを生み、
アビヤがアサを生み、

1:8 アサがヨシャファテを生み、ヨシャファテがヨラムを生み、
ヨラムがウジヤを生み、

マタイ 1:3~4
1:3 ユダがタマルによってペレツと
ゼラフを生み、
ペレツがヘツロンを生み、ヘツロンが
アラムを生み、
1:4 アラムがアミナダブを生み、アミ
ナダブがナフションを生み、
ナフションがサルマを生み、

マタイ 1:5~6
1:5 サルマがラハブによってボアズを
生み、
ボアズがルツによってオベデを生み、
オベデがエッサイを生み、
1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。
ダビデがウリヤの妻によってソロモン
を生み、

マタイ 1:7~8
1:7 ソロモンがレハブアムを生み、
レハブアムがアビヤを生み、
アビヤがアサを生み、
1:8 アサがヨシャファテを生み、
ヨシャファテがヨラムを生み、
ヨラムがウジヤを生み、

マタイ 1: 9-11
9:9 ウジヤがヨタムを生み、ヨタムが
アハズを生み、
アハズがヒゼキヤを生み、
11:10 ヒゼキヤがマナセを生み、
マナセがアモンを生み、
アモンがヨシヤを生み、

マタイ 1: 11-12
11:11 バビロン捕囚のころ、ヨシヤが
エコンヤとその兄弟たちを生んだ、
12:12 バビロン捕囚の後、エコンヤが
シェアルティエルを生み、
シェアルティエルがゼルバベルを生み、

マタイ 1: 13-14
13:13 ゼルバベルがアビウデを生み、
アビウデがエルヤキムを生み、
エルヤキムがアゾルを生み、
14:14 アゾルがツアドクを生み、
ツアドクがアキムを生み、
アキムがエリウデを生み、

マタイ 1: 15-16
15:15 エリウデがエレアザルを生み、
エレアザルがマタンを生み、
マタンがヤコブを生み、
16:16 ヤコブがマリアの夫ヨセフを
生んだ、
キリストと呼ばれるイエスは、この
マリアからお生まれになった。

マタイ 1: 17
17:17 それで、アブラハムからダビデ
までが全部で十四代、
ダビデからバビロン捕囚までが十四代、
バビロン捕囚からキリストまでが十四
代となる。

- 1:9 ウジヤがヨタムを生み、ヨタムがアハズを生み、
アハズがヒゼキヤを生み、
1:10 ヒゼキヤがマナセを生み、マナセがアモンを生み、
アモンがヨシヤを生み、
1:11 バビロン捕囚のころ、ヨシヤがエコンヤとその兄弟たちを
生んだ。
1:12 バビロン捕囚の後、エコンヤがシェアルティエルを生み、
シェアルティエルがゼルバベルを生み、
1:13 ゼルバベルがアビウデを生み、アビウデがエルヤキムを生み、
エルヤキムがアゾルを生み、
1:14 アゾルがツアドクを生み、ツアドクがアキムを生み、
アキムがエリウデを生み、
1:15 エリウデがエレアザルを生み、エレアザルがマタンを生み、
マタンがヤコブを生み、
1:16 ヤコブがマリアの夫ヨセフを生んだ。
キリストと呼ばれるイエスは、このマリアからお生まれになった。
1:17 それで、アブラハムからダビデまでが全部で十四代、
ダビデからバビロン捕囚までが十四代、
バビロン捕囚からキリストまでが十四代となる。

[マタイの系図]

今日はみなさんへの質問から入って行きたいと思います。
みなさんをご自分の家の系図を持っておられるでしょうか
先祖代々の家系図を大切に持っているという方もいるでしょうし、
いやあ、そんなの見た事ないという方まで様々だと思います

系図というのは基本的に名前が載せられているだけの記録文書です
それはある意味で退屈な情報の羅列と言う事もできるでしょう
しかし、それが持つ意味は計り知れないものがあります

聖書にはいくつもの系図がのせられています
一見すると、それらの系図は無意味でつまらないものに見えます
今風に言えば「わけわかんない」と言える代物でしょう
確かに聖書の系図はあまり人気がありません
そこには深遠な真理も神の教えも説き明かされていません
わくわくするような物語や興味深いエピソードも出て来ません

しかし、それでもなお聖書の系図には意味があり価値があります

新約聖書がマタイの系図から始まっている事は確かに偶然ではありません
そこには意味があり、福音書記者の意図があるはずで

イエス・キリストの誕生によって歴史が変わりました
歴史だけではありません。言うなれば、私たち一人一人の人生が
キリストの降誕によって変えられました

マタイの福音書はユダヤ人のための福音書と呼ばれています
旧約聖書において約束され、新約で実現した神の預言の成就を
マタイは書き記したのだと言われて

ユダヤ人にとってキリストの誕生は歴史の偶然ではないのです
先祖アブラハム、ダビデから連綿と続く、
神の約束の実現、預言の成就がそこにはあるのです

いやユダヤ人だけではありません
私たちもまたこの系図に無関係なのではありません
もし私たちがこの系図との関わりを持っているとしたら、
そこには計り知れない価値があると云わざるを得ないでしょう

そのようなわけで、マタイの記した系図を通して、
そこに何が書かれ、どんな意味が込められているのかを
今日はみなさんと一緒に考えていきたいと思うのです。

[不完全な世界にあらわされた完全な神の約束]

① 不完全な世界に
あらわされた完全
な神の約束

マタイの系図から言える第1のことを申し上げます
それは「**不完全な世界にあらわされた完全な神の約束**」
ということであります

1:17 **それで、アブラハムからダビデまでが全部で十四代、
ダビデからバビロン捕囚までが十四代、
バビロン捕囚からキリストまでが十四代となる。**

マタイ 1:17
1:17 それで、アブラハムからダビデ
までが全部で十四代。
ダビデからバビロン捕囚までが十四代。
バビロン捕囚からキリストまでが十四
代となる。

福音書を書いたマタイは系図の最後をこのようにまとめています
系図を3つに分けた上で、それぞれを14という数でひとくくりにする
この14という数には意味があります

聖書において数字が象徴する大切な意味がたくさん出て来ます
たとえば、唯一の神をあらわす1、三位一体の3、神の名をあらわす4

そして7は完全をあらわす数字とされています

その関連で言いますと14という数字は7と7を合わせたものであり、全き完全という意味にとることが出来ると言われます

ところがマタイの系図は実は不完全なものであります
そもそも3つの区分ごとに14代ずつにきれいに分かれています
しかし、実際には14は正確な数ではありません

実際、旧約聖書を数えていきますと14では収まりきらないのです
どう考えてみても名前を飛ばされた人がいる、つまり省略があるのです
そこまでしてマタイが14という数字にこだわったのはなぜなのか？

さらに言えば完全でないのは人間の数だけではありません
この系図に出て来る人々がそもそも完全ではないのという事実があります
旧約聖書を丹念に読みますとこれは罪と罪人のリストとさえ言えるでしょう

ユダがタマルという女性とどういう関係であったのか？
ラハブという人がどのような人であったのか？
ダビデがウリヤに一体何をしでかしたのか？

旧約聖書を知れば知るほど、この系図のあらわしているものが
不完全な世界にあらわされた不完全な人間の姿だという事が分かるのです
それではなぜマタイがあえて14という完全数にこだわったのでしょうか

それは不完全な世界にあらわされた完全な神の約束があるからです

①不完全な世界に
あらわされた完全
な神の約束

ユダヤ人の祖先イスラエルは選ばれし神の民でした
しかし、その実態は神を悲しませ、神を裏切る人の愚かさと
神の民にふさわしくない不完全なありさまだったのです

しかし、だからこそ神はキリストをこの世に送られたのです
アブラハムに向けられた全世界を祝福するという約束、
それはダビデの子孫によって成し遂げられると言う約束

どんなにイスラエルが罪にまみれた歴史をたどり、
ふさわしくない姿の中で苦しみ、もがいていたとしても
いやだからこそ、神はそこに完全な約束の成就を成し遂げられたのです

ではキリストの誕生を待ちわびる私たちの世界はどうでしょうか？
残念ながら私たちの住む世界もそして私たち自身も
完全にはほど遠い姿をさらけ出していることでしょう

しかし、だからこそキリストはこの世に生まれてくださったのです
不完全な世界に完全な神の約束を成就するために、キリストが
生まれてくださった。この事実をまず第1の事として心に留めたいのです

〔神の摂理は確かなものである〕

マタイ 1:5-6
1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、
ボアズがルツによってオベデを生み、
オベデがエッサイを生み、
1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。

1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、
ボアズがルツによってオベデを生み、オベデがエッサイを生み、
1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。

神の摂理は
確かなものである

マタイの系図から言えることの第2番目は
「神の摂理は確かなものである」ということです

摂理という言葉は聖書には出て来ませんが、聖書の真理を表す言葉です
それは神のご計画、神のご支配や神の導きをあらわすものと言えます
マタイはこの系図の中に神の摂理をあらわそうとしています
イスラエルはそもそも男性中心の社会でありました。
ですから系図には女性の名前を載せないのが普通であります

マタイ 1:5-6
1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、
ボアズがルツによってオベデを生み、
オベデがエッサイを生み、
1:6 エッサイがダビデ王を生んだ。

ところが、ここに女性の名前が登場します
ラハブやルツがどんな女性であるのか。
旧約聖書を開いて読んだ事のある人にはなじみの人物であります。

ただし、彼女たちは本来この系図に載る事はなかった人たちです
なぜなら、彼女たちは異邦人、外国人であるからです
しかし、マタイはあえて二人の名前をここに記したのであります

ラハブがサルマという人といつ、どこで出会ったのか
ルツがボアズと出会い、誰が生まれたのか
この出会いと誕生は決して偶然ではありません

結婚として夫婦となるという事は偶然そうなるというものではありません
そこには神の導きがあり、神のご計画があります

私たちもそうです。私たちがどんな親から生まれ、誰と結婚するのか。

それは人間の意志や思いを超えたところにあるものです
そこに神が働かれ、神の計画と導きを見い出す。それを信仰と言うのです

本来、異邦人女性との結婚はありえないこととされた時代
しかし、そこから救い主が生まれて来るということ
そこにも神の摂理があります。神の計画と導きが確かにあります

マタイがヨセフとマリアの物語を始める前にあえて系図から始めた理由
それがここにあります。イエス・キリストの誕生に神の摂理が働いている。
人間の力や考えではない。神の確かな導きと歴史を超えた壮大な計画、

マタイが系図を通して訴えようとしたことがそこにあります
神の摂理が確かであること。これこそが心に収めるべき第2の事でもあります

[キリストの系図は神の系図]

マタイ 1:1
「イエスはアブラハムの子、ダビデの子、
イエス・キリストの系図である。」

1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

系図を通して私たちが学ぶ第3番目、それはマタイによって記された
「キリストの系図が神の系図である」ということでもあります

③キリストの系図が
神の系図である

ルカの福音書にイエス・キリストのもう1つの系図が出て来ます
これはマタイが記した系図と色々な意味で違っているのですが、
決定的なのはルカの記した系図がマリアの家系のものであるという事です

そうするとマタイの系図はヨセフの先祖をたどって作ったものになるわけです
しかし、このマタイの記した系図というものは人間ヨセフの系図ではなく
キリストの系図であり、神の系図であるということです

系図というのは不思議なもので、もちろん日本だけにあるものではありません
世界中の国や地域で系図と呼ばれるものが作られてきました
たいていの場合、それらの系図は王様とか有力者の系譜をたどる為のものです

自分の地位や自分の身分は確かなものであり、血統に間違いはない
その家系や先祖のすばらしさや力のあることを示すために系図がある
つまり、それは人間のために人間によって作られた人間の系図です
しかし、マタイやルカが示した系図は人間の系図ではなく神の系図であります

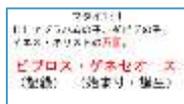
ユダヤ人にとって系図はとても大切なものとされています
なぜなら、それは自分がアブラハムやダビデの子孫であることを示すため、

すなわち自分たちが選ばれた神の民であり、
ユダヤ人としてのアイデンティティーを示すためのものだからです

しかしマタイはその正統なユダヤ人の家系にキリストが生まれた、
約束のメシアが誕生したのだと言わんとしているのです

系図というのは人間の積み上げてきた、人間の歴史を示すものです
人間の力によって作り上げ、築き上げてきたものの証しです
しかし、その人間の歴史に限界がある、欠点も不完全さもある
イスラエルの歴史がまさにそのことを示しています
アブラハムの祝福やダビデの栄光は時代と共にすたれ、
人々は罪にまみれ、苦しみにあえぎ続けます

しかし、そのような世界にキリストが来てくださった
神のひとり子が誕生してきてくださったのだ、
と言うことをマタイはこの系図を通して伝えようとしています



1:1に出て来る「系図」という言葉は原語で
「**ビブロス・ゲネセオース**」と言います。ビブロスは「記録」、
ゲネセオースは「始まり」や「誕生」という意味です
ですから系図は誕生の記録とか始まりの書という意味があるのです

ところが聖書でビブロス・ゲネセオース、始まりの書と言え
それは間違いなく創世記を指す言葉でもあるのです。すなわち
マタイは系図すなわちビブロス・ゲネセオースという言葉を通して
新しい始まり、神の新しい創造のわざが起こるのだと言うのです

イエス・キリストの誕生は新しい創造の始まりであります
人は新しく生まれなければ神の国を見ることはできないと主は言われる
しかし、そのキリストから新しいいのちが始まって行くのです

人が作り上げ築き上げることには限界があります
人間の歴史はまさにそのような事の繰り返しであり積み重ねでしょう
しかしキリストはそのような世界を新たに造り変えていくのです

アブラハムの祝福を携え、ダビデの子孫として生まれた方は
神の新しい創造をもたらす救い主であります
人には成し得ない事を主イエスが成し遂げてくださいました

だからこそマタイの記した系図は人間の系図ではなく神の系図なのです

今年、新型コロナウイルスが世界を変えたと言われていました
たった1種類のウイルスが大きな影響力と共に世界中に広まりました
しかし、キリストの誕生はそれ以上のものであります

イエスという幼子の誕生が世界を変えていきました
この良き知らせ、福音が世界中に広まり、大きな影響力を持ち続けています
私の人生もまた、この福音によって変えられました
そして、この大きな変革はマタイの記した系図から始まったのです

クリスマスの喜びは系図から始まりました
そこには神の約束があり、神の摂理があります
旧約の民は救い主、メシアの誕生を待ちわびていた事でしょう
私たちもまたキリストの誕生を祝うクリスマスを待ち望みます

しかし、何よりも神ご自身がこの時を待ち望んでおられました
預言の成就、約束の実現、新しい創造の始まりが
このクリスマスから、いや神の系図から始まったのです

今年もクリスマスを待ち望み、御子の誕生を迎えようとしています
私を変え、世界を変える約束の救い主が生まれます
そんな思いを抱きつつ、この年もクリスマスの喜びを
多くの方たちと共に分かち合うことができたらと思います。

●祈り イザヤ 9:6

ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。
主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と
呼ばれる。

神様、今年もまた私たちはアドベントの季節を迎えました
喜びと希望をもって待ち望みつつ過ごす時を迎えています

しかし、同時に私たちには重くのしかかってくる暗い現実があります
人間の力を超えた恐ろしい脅威にさらされ続ける現状があります
そのように弱く不完全な私たちのために救い主は誕生してくださいました
世界を照らす世の光、世界の希望として主は生まれてくださいました

私たちはなおも痛み苦しみ、うめきの声をあげています
自分ではどうすることもできない問題に叫び続けます
しかし、だからこそ私たちは救い主を必要としています
完全な神の計画の到来と実現を求めます

来週は、本当にうれしい洗礼式を執り行おうとしています
救いの神が確かにおられることを私たちはそこでも実感するのです
この私を変え、この世界を造り変えてくださる主の到来に感謝します

この年も闇に輝く光、私たちの永遠の希望である主を多くの人に
告知知らせるクリスマスとさせていただきますように

「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれた主、
クリスマスの主、私たちの主
イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします

アーメン

●祝祷

不完全な世に来られた完全なる主イエス・キリストの恵みと
確かな摂理をもって我らを導かれる父なる神の愛と
神の系図をもって救いを与えたもう聖霊なる神の力が
救い主の到来を待ち望む一人一人の上に
豊かに限りなくありますように。アーメン